

去る2月26日（木）と28日（土）、「視覚に障害のある方へのプログラム」を開催しました。これは所蔵作品展の鑑賞を主として10年以上続けているものですが、今回は「アンドリュー・ワイエス 創造への道程」展が対象。2日間を午前午後に分けた4回で、のべ42人が参加されました。



「目の見えない人がどうやって美術鑑賞を？」と思う方も多いでしょう。彫刻なら手で触れてもらうこともあります。絵画の場合は言葉で説明し、頭の中に絵を思い描いていただきます。初めに学芸員の私から画家ワイエスや彼の絵のテーマなどについてお話ししたのち、参加者一人ずつにガイドが付き添って展覧会場をまわります。ガイドは「名古屋YWCA 美術ガイドボランティアグループ」の皆さんです。

さて、言葉で絵を描くにはどうしたら？ 客観的な説明法としては、例えば「雪景色の中に二人の人在る絵」と主題を伝えた上で、絵の大きさや縦横の比率を話し、続いて画面のどのあたりに道や木や人が配置されているのか、そして人の性別や年齢、衣服、ポーズや表情など細部へと進めていくのがいいようです。でもこれだけでは絵が芸術作品になりません。その風景や人物と画家との関係といった情報を加え、構図や色彩・光・筆のタッチなどの効果を読み取り、画家の表現意図を解釈する必要があります。ちょっと難しそうですが、そこまで話そうと思うと、説明する人にも絵がどんどん見えてきます。

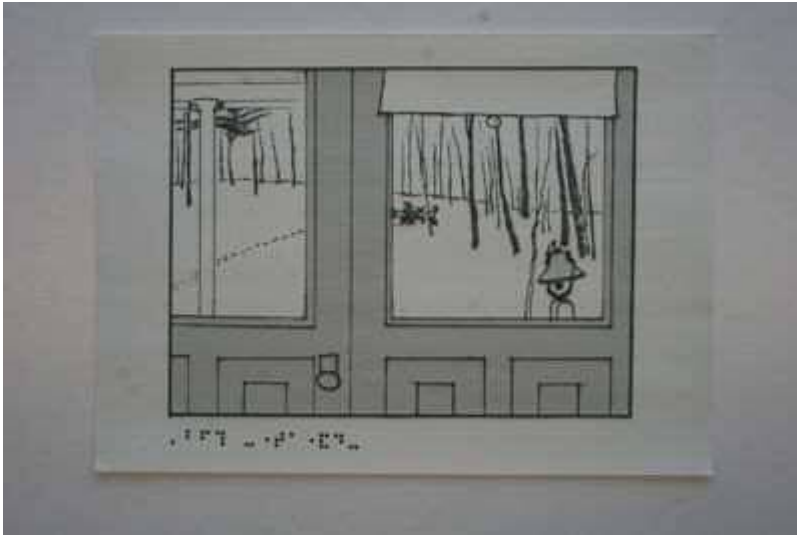
さらには自分自身がその絵をどう感じたか、個人的な思い出なども交えて会話ができると楽しいですよ。

このブログをお読みの皆様も、一度好きな絵の説明を考えてみてください。



絵の説明の補助として、黒で描いた部分が盛り上がり手で触れられる「立体コピー」も用いています。今回はWYCAの方々が4点のコピーを作ってくださいました。ところどころ線の太さを変えたり、網がけで面の手触りを変えたりといった工夫がされています。これら4点には私が解説文を書いてガイドの資料にするとともに、参加者にお持ち帰りいただけるよう点字にもしてもらいました（点訳にはボランティアグループ「六点会」のお世話になっています）。

↓立体コピー（手前に描かれているものと、遠くに描かれているものが、手触りで違うことが分かります！）



参加者は1時間半のプログラムが短く感じられるほど熱心に鑑賞され、後日「美術ボランティアのかたがたのおかげで目の障害があっても見えてきます」、「ワイエスの小説の中に入り込んで、ワイエスの視線で作品を見せていただき、私の脳裏に強く残り深く鑑賞する事ができました」といった感想が寄せられました。

(TM)